小説 綾守竜樹
挿絵 高浜太郎

**立ち読み版**

序章 006
第一章 切腹いたします 014
第二章 舐陰（クンニ）いたします 065
第三章 告白いたします 126
第四章 籠契（ろうけい）いたします 219
終章 247

# 登場人物紹介

Characters

## 久我(こが) 美由樹(みゆき)

特待生として私立此花女学園に通う頭脳明晰な少女。物事を自分の利得のみに照らし合わせて判断する性格の持ち主。

## 服部(はっとり) 二十輪宮(にそわのみや) 薊(あざみ)

伊賀忍者の末裔。百花忍軍第二十代目の頭として、あらゆる任務を冷徹に実行するくノ一。

## 緋冴(ひさえ)

薊の下につく中忍。チャイナドレスを纏う二十代後半の美女。普段は銀座の老舗クラブに勤めるホステス。

## ホタル

あらゆる動物を手なずけ操る特殊能力を持つ、銀髪の少女。下忍として薊に従う。

乳房のボリューム感を上下させると、喉の奥がネットリとざわめきだす。乳房の真下、心臓や肺のあるあたりから不思議な煙が送りだされ、喉や舌にえぐみのない焦げ臭さを味わわせる。私はおっかなびっくり、得体の知れない深海生物を相手しているみたいに、自分のふくらみを揉み続ける。腋窩がますます熱くなり、鎖骨に鋭い疼きが走る。

（……う、ン……そろそろ……尖端……さ、先っちょが……）

物言いたげになっている。

いったん左手と呼吸を止め、右手の歯ブラシを動かした。厚みを増した乳暈に、じわじわと近づけた。震える毛先と充血したそれの接触を、化学の実験でもしているみたいに見つめる。空気を攪拌している感じ、振動の雰囲気がしだいに強まってくる。

ガマンできなくなって深呼吸。湧いていた唾を呑みこんだ。両眼をつむり、乳首の付け根に押しあてた。

「……ッふぁ！」

掻きむしられる。ここが粘膜からなる部分なのだ、と改めて悟らされる。

つい声をあげてしまい、慌てて口を封じた。左手という介添え役が消えても、乳首が引っかかりになっているので乳房は流れなかった。小指の先ほどのそれはますます赤く、硬くなる。ビリビリと電気を放ち始める。

「……ぁふ……ふン……ンむ、む……ッ……！」

両肩をくねらせながらあて続け、肩胛骨が痺れてきた段階で右に移動させた。左乳首に余韻が残っているから、右のそれは深く刺さってくる。背の産毛が逆だち、喉と臍のあたりに甘いいがらっぽさが溜まる。

左、右とくり返しているうちに、たまらなさが噴きあがる。両方ともボール紙を突き破れそうな尖りと化す。乳房も熱っぽく腫れあがり、先ほどより重たく感じられた。いつの間にか視界が滲み、吐息は湯気になっていた。

歯ブラシを右手から左手に持ちかえた。ジンジンと痺れている突起を置きざりにして、霧吹き状の汗が浮いた腹部を撫でまわす。こそばゆい感じには、もうオトナの妖しさが含まれている。おヘソのまわりで円を描き、ショーツにぶつかったところで真横に移動。その動きと合わせるように、両膝を開いた。

「私の部分」はすでに熱を帯び、独特の匂いをくゆらせている——汗よりも甘酸っぱく、涎よりもナマっぽい。それに、濡れた草のような蒼さもある。

枕を背もたれにして上半身を軽く起こし、騒々しい毛先を左の内腿に押しあてた。

「……ッ……ッ……ッ！」

ビクン、ビクンと足が震える。内腿がみるまに真っ赤になり、静脈の青筋まで鮮やかに浮かびあがらせる。足の付け根ギリギリで持ち手を変え、右の内腿を撫でまわした。どちらもすぐに、火傷しそうなほど熱くなった。挟まれた股間が、もどかしげに汗を滲ませる。

恥骨の芯に思わせぶりなストレスを走らせる。再び左に戻して、ショーツの股刳り付近を撫であげた。爪先まで緩やかに痺れた。

（……そろそろ……いえ、もう少し……でも、もう……）

なんて非合理的な逡巡だろう。効率的に進めれば、たぶん一〇分分足らずで「処理」できるはずだ。それなのに戸惑い、ためらい、予定調和の行きつ戻りつをくり返して、得体の知れないモヤモヤを練りあげる。やるせなさ、つまりは無力感を味わう。両目を閉じ、瞼の暗闇に向かって熱っぽい意識を投げかける。

無力はいやだ。

力が欲しい。私は失敗しない、絶対にしたくない。

こみあげる狂おしさに導かれて、私は歯ブラシを真ん中に移動させる。白いショーツの底には、灰色の縦線が滲みだしている。その上端あたり、どことなく物言いたげな凸凹に、震える毛先を押しつける。

「……ふぁっ！」

ごく一点の圧力が股の、腹の、そして胸のなかでふくれあがり、空気鉄砲のように喘ぎを噴きださせる。私は片手で口を押さえ、股間から立ちのぼる狂おしさにのたうちながら、なおも歯ブラシを押しつける。

布地が一枚挟まれているおかげで刺激は和らげられ、ささくれ立った感じはない。また、

ショーツはわずかながら振動を伝えて、この突起ぜんたいを刺激で包んでくる。たちまち下腹の奥が潤みだし、粘っこい体液を分泌させる。そこに「洞窟」があることを、蜜の垂れる感覚で教えてくる。

「……あふッ！　ふッ、く！　くぅ……ンぅッ！　ん、ふぁ！」

しばらくすると、擦りたてられる突起が、全身の神経をリールのように巻きとりだす。手足の爪先が意思とは関係なく震え、無重力感とよく似た痺れに支配され始める。両膝が勝手に開き、人前では絶対見せられないガニ股になった。身体のありとあらゆる機能を収奪され、まったく無力な、肌色のイモムシにさせられていた。

でも、止められない。

私はますます歯ブラシを押しつける。掻きむしりの音が、水っぽくなっている。奥歯を噛み、腹筋を息ませながら、そこに居座るケダモノの目覚めを待つ。「自分」と思える空間がじわじわ縮められて、握りこぶしくらいになってしまう。

くる。

そのときの所作は、まだつかみきれていない。わかっている限りだと、崩壊は両足の爪先から始まっている。まず親指が丸まり、続いて眉根が下がる。内腿と首筋が冷たさを味わって、うなじと腰の裏が凍える。そのゾクゾクが身体の芯まで染みこんできて、握りこぶし大になった「私」を揉みしだく――。

「……ッ！」

ギュッと押しだされる感覚。息が詰まり、瞳の焦点をコントロールできなくなる。行き場のない締めつけのあとで、爆発的な開放感がやってくる。心身ともに、日常では決して出会えない弛緩を貪る。このときする深呼吸の甘さは、まさに麻薬だ。

気がつけば、身体じゅう汗まみれになっていた。ベッドのうえであられもなく寝そべっていただけなのに、とてつもない距離を全力疾走したようだ。吐息に合わせて胸が上下し、ふだんとは異なる存在感を訴えてくる。いま胸を、特に乳首を摘んで柔らかく転がせば、私は泣きだしてしまうだろう。

（……けど、あ、明日は……早く起きないと……いけないから……）

後ろ髪引かれる思いで、道具を持ちかえる。

シリコン製の「男性」はピンク色、全長一〇センチほどだ。太さはアルトリコーダーくらいで、先端部分がグルグルと回転する。通販のカタログによれば中級者向けで、「充足と開発を両方こなせるスグレモノ！」らしい。

一年生のGW休みで実家に帰ったとき、発作的に買っていた。性への憧れがあったとか、歯ブラシ以上の悦びを知りたかったとか、そういう積極的な動機によるものではない。

私は四月の段階で「合理性」を判定し、何人かの例外を除いてつきあいを拒絶した。いわば将来性ある孤立を選んでいた。だから、自分とまわりはちがうのだ、という証が欲し

かった。早く「女」になればなにかが変わる。そう信じていたのだ。
一生に一度しかないものを自分で、道具で散らす。ためらいはあったけれど、使命感のようなものに急きたてられた。
いまにして思えば、生活環境が激変したせいで軽いパニックに陥っていたのだろう。バイブレイターで自分を貫いたのは一種の自傷行為、薄められたリスト＝カッティングだったのかもしれない。
初めてのときは、恐る恐るだった。このように大きくて、凶悪そうなものが自分の体内に入るとは、とても信じられなかった――人は良きにつけ悪しきにつけ、成長するものだ。いまでは「上級者向け」に進もうかな、と思っている。
「……はぁ、ふぅ……ふぅ、はあ、はふぅ……」
左手でショーツの股布をひっかけ、サイドにずらす。申し訳程度のヘアーがはみ出してくる。思っていたより濡れていた。右手のバイブを熱っぽくなった傷口にあてがい、軽く目を閉じる。
男性の化身を突きつけているのに、暗闇に浮かびあがるのはどういうわけか、母の後姿だ。私にも受けつがれている猫っ毛の黒髪。それが風にそよいで、もはやハッキリとは思いだせない匂いを振りまく――。
なにかに蹴りつけられるように、ピンク色の凶器を押しこんだ。

私のなかに埋めこませた。
「……ンふあッ！」
母の後姿は瞬く間に消えて、灰色っぽい光がやってくる。ゆっくりと目を開ければ、視界ぜんたいに涙の膜がかかって、現実味が薄れている。目や耳よりも、股間から伝わってくる刺激のほうが鮮明で、確実で、圧倒的に力強い。それに身を委せれば、一瞬だけどなにもかも忘れられる。
「はあぁ……はふぅ……ふうぅぅ！　ふはぁぁ……！」
粘膜や筋肉たちの抗いをなだめすかして、私が届けられる限界点まで貫く。自分のなかに空洞があること、それを満たされていることが同時に自覚できて、「やっぱり」と呟きたくなるような安心感に包まれる。内部の蠢きが道具越しに伝わってくるのが、なんだかとても恥ずかしい。
もはや息を整えることなど不可能だ。私はフィナーレを飾るために、左手を自由にしてボディ＝ピローを抱きしめさせる。唯一の相棒を首の根元に絡ませ、触れられる範囲ぜんぶで密着させる。本当は足も絡みつかせたいところだけれど、以前汚してしまったことがあるのでガマンだ。いわゆるコアラのポーズもどきになったところで、充足と開発のスイッチを入れる。
「……ふあああッ！」

胎内の奥、もっとも無防備なところを掻きまわされている被虐感。狂おしいようで懐かしい。攪拌の衝撃は一気に喉元まで突き抜けてきて、素の嬌声をほとばしらせる。全身の毛穴がぶわっ、と開いて匂う汗を噴きだし、私が女として咲いていることを知らしめる。枕を力いっぱい抱きしめ、それに顔を押しつけて声を殺した。

刺激の出口を塞ぐとすぐに股間が煮えたぎって、腰からしたを液状化させる。バイブの先端が硬くなっているものを押してきた。

「……ッ！」

身体の芯を不定形の串に貫かれる。熱くて、まぶしくて、火力とでも言うべきエネルギーがあって――落雷に撃たれたら、きっとこんな感じになるのだろう。芯から末端にかけて濃厚な狂おしさが雪崩れてくる。あちこちの筋肉がマゾヒスティックな泣き笑いを浮かべて、私を無秩序に痙攣させる。

「……っあ、あ！　あっ、あっ、あああっ！」

最初の稲妻が通り抜けても、棒状の雷雲は奥深くに居座っている。機械ゆえの無頓着な首振りがすぐに、私の硬くなっているところを弾きあげる。コツン、コツン、という打突の音を、鼓膜ではなく腹膜で伝えてくる。

「あっ！　……はぁ、はァ、はあァ……ああっ！」

いまの私は、性についてあるていどの知識を持っている。「子宮孔」なる用語も知って

いる。それを押されると子宮ならびに内臓ぜんたいが揺らされ、女性にしか味わえない内臓感覚が醸しだされる、というメカニズムも学んでいる。

だから安心して、私は女に生まれたことを確認し続ける。ボディー＝ピローを潰さんばかりに抱きしめ、腰や腿をビクビクさせる。熱暴走ぎみの脳裏に、稲光に照らされた胎内がレントゲン写真の趣で映しだされる。

できるだけ声を押し殺し、数年先を見越しての訓練を噛みしめ続ける。忘我の境地を行き来しつつ、私は朝起きたらどのように洗濯しようか、と考える——。

※

忍務第二〇六号、状況「て壱」。

僕らは、此花学園女子寮そばに陣取った。

大殿さまが二〇六号を下されたくノ一は、僕、緋冴、ホタルなど五名。僕らは手近な木に登り、樹冠に腰をおろした。まえもってしかけておいた穴を頼りに、忍術「フクロウ目」を効かせた。

ベッドのうえ。

もうすぐ姫になられる久我美由樹さまが、自らを貫き続けている——。

「……正直言うて、このお務め」緋冴が小首を傾げて、「いらんのとちがいますか？　ご

覧なはれ、お頭……ウチらのお姫さんは、まだ研鑽積まれてはりますえ？」
「それは僕らが判断することではありません」短く答えた。「僕らは百花のくノ一として、与えられた命を果たすだけです」
「……で、でも」ホタルが、ぽつりと反駁する。「あのヒト、たぶん……カン違いしてる……カン違いで……あんなこと……してる……よ……？」
「そうやねえ」
いつもの緋冴らしからざる口調だった。
「あの娘、あないに自分を追いこまんと……耐えられなかったんやろうね。ホンマはとっても……」珍しく言いよどんで、「……何とも不憫な子やねえ……まるでウチらのお頭にそっくりや」
聞きずてならなかった。
「……美由樹さまと僕のどこが似ているのです？」
緋冴は微笑しか返さず、ホタルは困惑しきった表情を浮かべている。
しばし考えたが、任務とは何の関係もなさそうだ。今後の方針を確認した。
「この女学校は、もうすぐ冬休みなるものに入ります……大殿さまの情報によると、美由樹さまは母君のお墓参りのため宇志久市に泊まるそうです。僕らはそのときに……」

「……起立、礼」

私の号令で二学期が終わった。

先生が帰るのを見計らって、私は教壇にあがった。黒板を拭き、チョークの粉を払い、講卓の引きだしも開けてゴミを片づけた。

「さすが、一年から委員長やってらっしゃるだけありますわね……いまから長期休暇後のポイント＝アップを仕込んでおかれる、と」

クラスメイトの当てこすりなど無視した。

ほかの皆は、間近に迫ったクリスマスや年末年始の話題で浮かれている。お誘いと自慢が交錯し、洋菓子の飴掛けデコレーションじみた網を張りめぐらせている。私は当然、どちらにも縁がない。生徒会がらみの書類もすでに提出したし、さっさと自室に戻って帰省の支度でもしよう。

教室を出て、玄関まで降りた。

すれ違った生徒たちからイヤな感じの笑顔を向けられたが、べつに気にしなかった。下足箱に手を伸ばしかけたとき、後ろからの気配に気づいた。

校内一の「ガリ勉優等生」と呼ばれる私は、女子校ならではのイジメも経験している。すばやく振りかえり、カバンを胸のまえに突きだした。

「……わっ！」

## 第二章　舐陰（クンニ）いたします

「……さん……お姫さん……」
しばらくのあいだ、呼ばれているのに気づけなかった。
「……そないに気張って声を殺したら、あきまへん。酸欠になってしまいますえ」
汗びっしょりの目元を拭われた。緋冴さんは私の胸のうえで両手を組み、そのうえにあごを乗せて見下ろしてくる。
「お姫さん、女心地になるンをうしろめたく思うてはりますな？」
「……」
「これはなァ、当たり前のことなんよ……」緋冴さんは両手を解き、私の胸に下ろしてきた。「神さんが、ウチら女に与えてくれはったご褒美なんどす」
ブラジャーのボーンみたいに付け根を押さえ、したから支えあげてくる。乳房が揺らされ、尖端部が空を斬る。そのわずかな刺激にも、私は新鮮なものを感じてしまう。
「気にせんと乱れなはれ……」指を沈みこませてくる。「こないなときぐらい、思いっきりワガママになりなはれ……」
幼児に向かって「いないいないばあ」をくり返しているような揉み方だった。くすぐったさの陰から現れる妖しいこだまが、ふくらみのなかに反響した。
「……ふあ、あ……あああ、ああ……」
マニキュアを塗った指先が、しだいに力を強めてくる。乳房だけでなく腋のした付近ま

で、ゆっくりと揉みこまれる。一度引いた汗が再び滲みだし、私の肌をてからせ始める。胸の尖端は、自分で歯ブラシを押しあてているときよりも硬くなっていた。小さな心臓みたいに脈打ちだしていた。

緋冴さんが頭を下げ、右の頂きを見つめてくる。真っ赤な瞳にチシャ猫の笑みを浮かべて、やはり真っ赤な唇を開いた。

「……初めてやね？」

なにが、と訊くまでもない。特殊な体型の持ち主でない限り、自分で自分を味わったりはできない。粘膜どうしを重ねられるのは、ふつう二人からなのだ。

胸の尖端に、ぬめらかな熱気がかかってくる。未知の刺激を予感して、背筋がゾクゾクし始める。緋冴さんはたっぷり三〇秒の溜めを挟み、長い舌を伸ばしてきた。乳首ぜんたいを押し包み、ゆっくりと舐めあげてきた。

私の呻きは、きっと部屋の外まで漏れただろう。薊やホタルちゃんに聞かれてしまったかもしれない。声を抑えようと気張ったところを、再び舐めあげられた。呆気なく崩されて、真っ赤な喘ぎを漏らしてしまった。

「ああっ、だ、だめっ！」

怖い、と思った。

自分の身体をコントロールされる、他人の愛撫に操られる。自分で慰めているときとは、

受け身の生々しさがまるでちがう。私は初めて、「女になる」ことを実感した。それはいままで病気ひとつしてこなかった健康な人が、急性盲腸でいきなり開腹手術を強いられたときの恐怖に近いかもしれない。

「いや……いやあっ！」

これまでの拒絶とは異種の金切り声をあげて、思いきり身をよじる。緋冴さんは再び、私を抱きしめて、

「怖くない……怖くないんよ……」私の背をあやすように叩いた。「……怖くない……お願いやから、ウチを信じて……」

額に、キスのおまじない。

「……すぐエエ気持ちになれるから……あないな枕ナシで寝られるようなるから……」

首筋、鎖骨、肩。腋窩、胸の谷間、おへソ。口づけの雨を浴びた。

「……あ、ふあ……あっ……あ、あ、あ……！」

柔らかくて、ほんのり湿っていて、そして温かい連打だった。全身の緊張感が溶けていき、なんだか関節まで柔らかくなったみたいだ。私の目尻から不安が抜けたのを見取ったらしく、緋冴さんがまた胸をつかんでくる。マッサージするみたいに揉みたてながら裾野に頬を擦りよせて、

「……委せたって、ね？」

私は、ホタルちゃんみたいに頷いていた。

緋冴さんの真っ赤な唇が、私の尖端に近づいてくる。歯ブラシで磨いているときとは比べモノにならないくらい、そこは尖っている。ほのかな吐息。生ぬるい湿り気のあとで、ぬめらかな圧迫に包まれた。

「……ふあああ……」

緋冴さんが唇をすぼめ、全方位から締めつけてくる。胸の先端を濡らされているだけなのに、髪を洗っているようなびしょ濡れ感を覚える。

ぬめらかな密室のなかを、長い舌が泳いできた。乳首の頂きをノックされた。

「……あぁっ！」

緋冴さんが唇を「う」と「お」の形に開け閉めしながら、舌を繰ってくる。乳首を磨いているみたいに擦りあげ、からかうように押してくる。粘膜どうしの戯れが、これほど甘美なものだとは思わなかった。私は両手で口を押さえ、こみあげてくる甘い呻きを押し殺した。

反対側の乳頭もくわえられ、同じように舐められる。それが終わったと思ったら、今度は左右の胸を中央に寄せられ、左右一緒にくわえられた。

「だ……あぁっ、だめぇ……」

正直に告白すれば、本気の「だめ」ではなかった。オトナの女性(ヒト)はもちろん、拒絶の陰

に見え隠れするものに気づいてくれた。瞳をくるりと回してみせただけで、両方どうじに舐めてきた。

背筋を震わす粘性の快感が、挟みうちでやってくる。胸での刺激が、なぜか背骨の内側にまで食いこんでくる。みっしり、かつ、ネットリしたくすぐったさに、魂まで溶かされてしまいそうだ。やがて縦に丸めた舌先を左右の狭間に出し入れされ、舌裏のもっともヌルヌルした粘膜で擦られた。

たまらなかった。

「はあああ……いい……」驚くほど素直に言えた。「き、気持ちいい……」

緋冴さんが胸から顔を離し、また安心のおまじないをしてくれた。

私の上半身を抱え起こし、右腕を背に回してピエタのポーズを取らせる。そのまま私の右胸をつかみ、指先で乳首を押さえる。左手で私の乱れ髪をかきわけ、頬を撫でた。首筋、胸の谷間、おヘソのあたりまで滑らせてきて、一線を越えた。

「……ッ！」

私の緊張をなだめるように、右乳首を捏ねてくる。赤ん坊の指を相手にしているような優しい手つきが、私に快感と安心を与えてくれる。

緋冴さんにとっては、怖がる私をなだめすかしながらのプレイだ。夜のパートナーというより、トレーナーをやっている気分だろう。かつて江戸時代のお姫様は、春画をテキス

トにして先輩たちからセックス＝カウンセリングを受けたそうだけれど、いまの私たちがしていることはそれに近いのかもしれない。

緋冴さんの指がショーツを越え、内腿のあたりを撫でてきた。熊手のかたちで熱っぽくなっている肌をあやし、膝のあたりまで下りたら付け根にUターン。白いショーツに触れるかどうかというところで股間を飛び越え、反対側の内腿を撫でおろす。たいして力が込められてはいないのだけれど、その行き来をくり返されるうちに、私はあられもなく下肢を開かされていた。胴底の温もりと微妙なチリチリ感を、いつになく味わっていた。

「ほな、次はもっとエエ気持ちに連れてってくれはるところや……」

キレイな指が、わななく股間に差しのべられた。まるで小犬の頭に手を乗せるように、その部分を押さえられた。

「……う、あ……あ、あああ……」

胴の真下に他人の手がある。恥ずかしいと思う一方で、一人では抱えきれない秘密を共有してくれる人が現れたような安心感も覚える。

緋冴さんが私の瞳を見つめながら、底の手を動かし始めた。

ショーツのうえから前後に、曲面をなぞるみたいに。私を怯えさせないようあまり力を加えず、指先の繊細さを塗りつけてくる。胴体そのものを揺らされているような心地に、私は爪先を丸めていた。自分から緋冴さんに抱きつき、チャイナ服の襟をしわくちゃにし

た。
「……ほら、べつに怖いことないやろ？」
指先が女性器の形をなぞり始める。恥丘のまるみを意識させられる。自分の裂け目がどこから始まってどれくらいあるのか、改めて悟らされた。私は奥歯を噛み、カメのように首をすくめ、ときおり背筋をビクつかせた。
「……お姫さん、気づいてないようやけど」クスッ、とオトナの笑みが降ってきた。「エラい情熱的やねえ。もうこないに濡れてはる……」
緋冴さんが左手をあげて、軽く振ってみせた。窓から差しこむ光に照らされ、白い指は油を塗られたみたいに輝いた。そのまぶしさを目にしたことで、私はやっと自分の惨状を知った。股布には、早くも楕円形の滲みが生じていて――少し匂った。
頭の奥で爆発音がした。
物も言えずに両手を伸ばし、股間を隠そうとする。緋冴さんは左手ひとつで抵抗を払いのけて、私のそこをあられもないままに留め続ける。
「……うふふふ、初々しなあ……お姫さんはホンマに、かいらしい娘やねえ」
ややワルっぽく囁かれた。
「……あう、うう……うううー……」
手玉に取られているようで悔しい。なのにどこかホッ、としている自分もいる。熾火（おきび）の

ように燻り続けている快感も手伝って、頭のなかで地震が起きていた。どうしようもなく目頭が熱くなり、気がついたら涙をこぼしていた。緋冴さんが頬にキスし、涙の線を舐めあげてきた。

「エエんよ。泣きたくなったら泣く、叫びたくなったら叫ぶ……」

これまでとは異なる力強さで股間を押さえられる。中指の腹をもっとも湿っている部分に食いこまされ、粘膜と股布をじかに密着させられる。

「……それは閨のオンナに許された特権なんやから」

緋冴さんの中指が、ショーツのうえから掘ってきた。

「あっ、んあっ！」

薬指と人差し指で左右の花びらを挟まれ、真ん中だけを浚渫(しゅんせつ)される。濡れたショーツの御守りが、犯されている感を和らげてくれている。生まれて初めて、他人に身体を掻きわけられる衝撃。私は呆然と興奮に引きさかれる。耳たぶまで熱くなり、視界そのものが潤みだす。ああ、ああ、とわれながら色っぽい声で鳴いてしまう。

これがホントの交わり、愛のあるセックスなんだ。

緋冴さんの指先が送りこんでくる快感は歯ブラシのそれとちがって、少しも押しつけがましくなかった。私ひとりでは具体化できない欲望に手を差しのべて、そっと引きだしてくれているようだった。

左指の開墾はペースを保って続けられ、私は着実に押しあげられる。首まわりの肌が真っ赤になり、腋窩から汗が垂れた。意識すまいとしていたけれど、もうショーツの粘音を無視できなくなっていた。

「……お腹の底から叫んだってや」

私の呼吸が整うのを待って、濡れた溝を掘りあげられた。それじたいは少し深かったくらいだけれど、最後のトドメが強烈だった。真っ赤に塗られた爪が、ここまで放置されていた女性の突起をひっかきあげた。

「……あああああ！」

私は、呆気なく達していた。

緋冴さんに導かれたそれは、静かな波のようにスムーズで、時間の流れとしっかり結びついていた。言いかえるなら、ごくごく自然な、当たり前の身体現象だった。私は少しだけ息を止め、手足を微痙攣させた。呼吸できるようになるやいなや、気持ちのよい汗を噴きださせた。緋冴さんにしがみつき、露わな胸板に頬を擦りつける。身体の芯に残る痺れを、うっとりと噛みしめる。

独りで慰めていたとき、「これ」は画然と区切られるものだった。

足の指が引きつって、頭の奥がシーンとして、エトセトラ。本能に書きこまれたプログラムを手順通りにたどり、私のなかに「イッている私」を顕現させる。それはまるで、別

人に乗り移られるような体験だった。
「あああ、ああ！　ふああ……ふあああ……！」
でも、ちがうのだ。「イッている私」も私であって、なにひとつ変わるわけではない。孤独の遊戯をくり返してきた私は、そんな当たり前のことにやっと気づかされた。
「……ね？」緋冴さんは、私を力いっぱい抱きしめて、「これは怖いもんやないし、なんや特別のものでもない……ただ、こうして肌と肌をくっつける気持ちよさが、ちょっとだけあふれ出したもんなんよ」
緋冴さんの口調は、本当にカウンセラーみたいだった。
「お姫さんが、気持ちようなるンをうしろめたく思っとったのは、心にゴマカシがあったからや。お姫さんは単に、人肌恋しかった……」
少し時間を取って、
「……寂しかったんやろ？」
「……」
「ウチらでよかったら、いつでも呼んだってください……ホタルは、まだムリやけど」
顔をあげ、目と目で見つめあう。どちらともなく吹きだしてしまう。緋冴さんは私を壊れ物のように寝かせ、自らも隣に臥した。こちらを向いて肘枕をつき、私の髪をゆっくりと撫でてきた。

「お姫さんが眠るまで、こうしてそばにおります」
「……うん」
歯ブラシやバイブでしたあととちがい、温かな疲労が込みあげてくる。意識と充実感が、利のいいレートで交換される。眠気を甘く感じたのは、実にひさしぶりだった。
私は印籠の持ち主となれたことを感謝しながら、睡魔に身を委ねた。
もうボディ＝ピローは必要ない。本気でそう思った。

起きるのが、とても気恥ずかしかった。
でも、ひさしぶりに気持ちのよい朝だった。
枕元に替えの下着と、新しいワイシャツが並べられていた。いそいそと着替え、客間に出た。すでに暖房が焚かれ、よく温められていた。卓の四面に並べられたザブトンが、同居人の気配を漂わせていた。
嬉しいような居たたまれないような、自分でもいわく言いがたい気持ちになった。私はサンダルをつっかけ、朝の寒さで気を引きしめようと外に出た。眼鏡をかけず視界をぼやけさせたままでいるのが、ちょっと心地よい。
「……な」
まだ薄暗い灰空のした、ほぼ全裸の美少女が踊っていた。

薊の胸にはヨコに一本、ちょうど乳首の真下を通る刀傷が走っていた。ほかにも傷はあるけれど、これほど長くて、太くて、目立つものはなかった。

「……」

胸の形は、左右とも理想的だ。誇らしげに突きだしていながらも恥じらいを忘れず、ほんの心持ち俯いている。尖端はキレイな紅色で、土台相応に大きい。女の私でもぜひ吸いついてみたい、と思わせられる。

でも。

傷が癒えるさいに引っぱられたらしく、乳暈はタテに縮められて、俵型になっている。乳首も暗がりで育てられた芽のように、思いきり俯いている。そこまで細かく見なくても、白い肌とヨコに走る赤黒さの対比は強烈だ。ほかの部分がほぼ完璧であるだけに、かえって悪目立ちして、猟奇趣味さえ漂わせてしまっている。

「これは……母が唯一、謝ってくれた傷です」左手でなぞって、「ほかの傷は『未熟者』と叱られただけでしたけれど……母はこの傷口がふさがるまで、かいがいしく世話してくれました……伊賀の秘薬を塗り、膿は口で吸いだし……」

あっ、と思いあたる。

――あの娘なァ、ヌルヌルしたモンに胸ェ擦られるンが……お舐されるンが大好きなンよ。まあ、ちょっとワケありなんやけど……。

「……驚かれたでしょう？　傷そのものはもう完治しているのですけれど……」
私はまた薊にしなだれかかり、虎縞模様に寝かしつけた。
「……ひ、姫さま？　い、いますぐお見苦しいものを隠しますので」
「だめ……」横になったせいで少し流れた胸を、そっとすくいあげる。私の手では抱えきれない量感が、ババロアのように揺れる。「……見苦しくなんかない」
たおやかな弾力にうっとりしながら、左胸に口づける。
「ンッ！　……み、美由樹さま……」
ちろっ、と舌を伸ばし、傷の左端に触れた。薊は肩をうねらせ、怯えているような、期待しているような下目遣いをしてきた。私はそこにキスしてから、乳頭まで舐めあげた。
「……あああああっ！」
薊が背を反らし、頤を突きあげる。初めて聞いた薊の叫び声は、女性のそれにありがちな刺々しさがなくて、アリアの一節みたいだった。
「あああ……ひ、姫さま……お……おやめください……」
「……どうして？」
尋ねて、乳頭から谷間まで傷痕をなぞる。薊は先ほどと同じような悲鳴をあげ、潤んだ瞳を向けてくる。私は谷間の汗を吸いとり、右胸の乳頭まで舐めあげた。
「……あッ！　あ、薊が……伽のお役目を……は、果たせなくなってしま……ああっ！」

目で否定し、舌先で乳暈をなぞった。薊はあっという間に腋窩を汗ばませ、体臭を強めてきた。私もまた、自分の鼓動が聞こえるくらい興奮していた。左手で乳頭を縊りだせて、俯いている乳首を含んだ。

「あーっ！」

舌先を繰り、乳首を弾き起こすように舐る。バネじかけみたいに戻ってしまうそれを、何度も弾きあげる。薊はそのたびに肩をくねらせ、濡れた叫びを吹きあげた。私を押しのけようと両手を動かしかけては、ハッとしたようにマットの虎毛を握りしめた。

私はいったん頭をあげて、薊の顔を見やった。

汗まみれの額や頬に、ほつれ毛が張りついている。いつも吊りあがっていた目尻が、いまは真っ赤に染まっている。それらの綻びが、この常人離れしたくノ一をどことなく、泣き虫な感じに見せている。

ひょっとしたら、これがホントの薊なのかもしれない。

精いっぱい背伸びして、凛々しくあろうとしている女の子。気を抜くと、すぐ寂しがり屋で泣き虫な地が出てしまう――。

「これは、だいじょうぶのキス……」

私はまた口づけを交わしてから、左胸に移った。胸の付け根から螺旋を描くように舐めあげて、乳暈を何度もなぞる。焦らされている乳首の震えが、私の唇に伝わってくる。

「姫さまっ、お、お願いです……これ以上されたら、薊は……薊は……」
「……いいよ」充血している横っ腹に、息を吹きかけてみた。「言ったよね、私は……私も、薊のすべてを見たいの……伽のことなんて忘れていいから……」
含んで、吸った。
「……ッ！　……ッ……ッ……ッ！」
薊は奥歯を噛みしめて、胸の先端からほとばしるものをやり過ごそうとする。その表情のいじらしさに、私は我を忘れていた。左右隈なく舌を這わせ、ふくらみのあちこちにキスマークをつける。緋冴さんの動きを、見よう見まねで試みる。たどたどしい愛撫だったと思うけれど、薊は情熱的に応えてくれた。ますます嬉しくなった。唾液で照り返すようになるまで舐めまわしてから、
「お、おやめ……くださ……ッ……やめ……ああっ、姫さま……ぁ……」
両手で乳首を捻った。
「……あッ！」
薊が声帯をねじ切られたように、叫び声を詰まらせた。続いて全身の毛穴を開き、甘い汗を噴きださせた。
（薊が、昇りつめた……ううん、そうじゃなくて……）
私が昇らせた。

生まれて初めて、誰かを絶頂に導いた。

こざかしい理屈なんて抜きに、私はまちがいなく、薊を気持ちよくしてあげられた。自分以外の誰かと、あの悦びを共有できたのだ。それが嬉しくて、なんだか泣きそうになる。震える薊が、とても可愛らしく感じられる。

「……ッ……ぁ……あ……ふぁ……」

薊はまだ、唇を半開きにして舌を踊らせている。そのなよやかな動きに引きこまれ、私は赤布に突っこむウシみたいに、薊の舌に食いついた。のたうつそれを前歯と舌で挟みながら、乳首をくりくりとよじった。

「……はぁ、あむっ！　ふむっ、あむぅ！　むむぅっ！」

私よりもずっと強いくノ一が、たった三カ所の刺激に全身をビクビクさせる。泳げない子どもみたいに、力いっぱいしがみついてくる。汗まみれの肌と密着させられて、熱と、ぬめりと、おののきが伝わってくる。

嬉しい。とにかく、嬉しくてたまらない。

私は酔ったように、乳首を弄り続けた。親指の腹で転がし、人差し指で爪を立てた。指の背をあてて人差し指と中指のあいだで挟み、親指でギュッ、と潰した。どれも緋冴さん仕込みの技だった。薊は愛撫を変えるたびに背をバウンドさせ、目尻の涙を盛りあげた。ついにあふれだしたので、私は舌を離してそれを吸った。汗と同じ成分だってわかってい

るのに、とっても甘かった。
「……っふああ！　あああ、ああ……ひ、姫さま……お願いです、お願いで……すから、もう……もうおやめ……あっ！」
「どうして？」背筋がゾクゾクする。興奮のあまり、舌を噛みそうだ。「いや？　気持ちよくない？」
「いえ、そうではないのですが……そ、それっ！　ああっ、そこは！」
私はまた、愛し方を変えた。乳頭よりやや鎖骨側に二本の指をめりこませて薊の下半球を反らすと、傷痕から乳首の腹側にかけて親指でなぞりあげた。
「ここは、なに？　どうしたの？」
「……気持ちいいんですっ、気持ちよすぎてだめになってしまうんです！」
「ホント？　だって、胸に触っているだけなのに……」
「……うああ、ほ、本当です！　本当ですから、だからあ……！」
薊が、また背を反らした。首を振り、虎縞模様をバックに黒髪をくねらせた。曲線が折りなす艶やかな動きには生命力さえ感じられて、どうして「髪は女の命」と言われているのか納得させられた。
「でも、薊っていつも遠慮して、本音を聞かせてくれないし……」どうしてだろう、意地悪なセリフがするすると出てしまう。「……だから、薊の限界を見てみたいなあって」

いったん胸から手を離し、今度は左右から寄せて谷間を消した。大きな胸だから、乳首どうしをネッキングさせられた。私は見せつけるように口を開け、両方いっしょにくわえこんだ。傷痕に沿って舌を振り、左右ほぼ同時に舐めまわした。

「……あーっ！」

薊が吹っきれたように叫び、私の頭を掻きまわしてくる。髪をひっぱられるかすかな痛みに興奮させられて、私はますます舌の動きを速めてしまう。

「だっ、だめ……薊、もう……もう、だめぇっ！」

くノ一が、私を乗せたまま腰を浮かせた。私の視界に、喉の付け根と暖炉の炎が飛びこんできた。まるで計っていたみたいに、薪が弾けて音を立てた。

「……イクッ！」

薊が焼けつきそうな声で叫び、糸が切れたように身を沈ませた。

——そうすれば喜ばれます。

薊の言ったとおりだった。それを耳にした瞬間、私のお腹の底も熱くなった。まるで、私まで達してしまったような充実感があった。

もっと聞きたい。

聞かせて欲しい。もっと薊に叫ばせたい、私の舌で溶かしてしまいたい。私は、加減を知らない子どもの執拗さで吸いついた。むしゃぶり、歯を立て、胸ごと揺すって口内の粘

膜で擦った――。
「……あ」
しばらくして、我に返った。
「ご、ごめん、薊……！」
くノ一が、さめざめと泣いていた。両眼から静かに涙を流し、右手の中指を噛んで叫び声を殺していた。私は慌てて口を離し、胸からも手を離して震える頭を抱きかかえた。
「私……私、その、加減がわからなくて……」
「……はい……だ……だいじょうぶです……」ぎこちなく微笑んで、「ただ……少し休ませてください……こんなふうになったのは……初めてなので……」
私はいったん薊のうえから降り、思いたって電気を消した。炎の灯りだけにして、薊の隣に寝そべった。
「……」
メリハリの利いた薊の裸身が、炎の揺らぎに合わせて光と陰を切りかえる。雪白の肌が炎の赤を吸って、いかにも優しげに輝いている。美しくて、艶めかしくて、私はため息をついてしまった。空咳をしてごまかしていると、
「少し換気をしましょう……」
暖炉の煙を吸ったと誤解したらしく、薊が立ちあがって窓に向かった。私の前で黒髪の

滝が流れて、褌の食いこんだお尻を隠した。ドア兼窓が少し開けられると、カーテンの隙間から蒼い光が差しこんできた。

「……せっかくだから、ばーんと開けてみない？」

薊はあたりをうかがうような素振りを見せてから、カーテンを開けた。夜空を背にして、振り向いた。

星明かりが薊の裸身を包みこみ、淡い燐光を灯させる。髪も肌も蒼く染まり、ただ瞳だけが元の色を守り抜いている。そのまま放っておいたら、夜空に溶けこんでしまいそうだ。思わずかぐや姫を連想させられた。

私は駆け寄って正面から抱きしめた。その場で膝をつき、眼前のおヘソにキスしてタテ長のくぼみを舐めた。薊が身を震わせて、肩をつかんでくる。私は魅入られたように、ほんのりと匂う股間に手を差しむけた。

再び熱っぽくなった内腿を撫で、食いこまれている部分に触れる。薊は割とふくよからしく、黒い前布がそこの量感をむりゅっ、とはみ出させていた。割れ目のあたりに中指をあてて、軽く押しこむ。ぐっちょり濡れていて、指の谷間がすぐにヌルついた。

「……ん……ッ……」

子どもの頬めいた弾力の狭間に、繊細な柔らかさがある。初めて触れる他人のそれは、私にはとても可憐なものに感じられた。先ほどの失態はくり返すまい、と言い聞かせて、

愛らしい感触を擦った。じょじょに指を沈みこませて、柔らかな部分を広げた。
「……あの、薊……これでいい……のかな？　気持ちいい？」
「あ……はい、姫さま。気持ちいいです……」
見ると股布は女性の部分にめりこんで、まわりの形までくっきりと浮かびあがらせている。裂け目の頂きあたりには、ちょっと出っ張っているものがある。私は溝を限界まで掻きあげて、最後に尖りを突いてみた。
「……ひうっ！」
こちらのほうが効くらしい。薊が途端に内股になり、腰をくねくね踊らせ始める。私のつむじめがけて、熱い吐息を降らせてくる。
「……薊」唾を飲んで、「私、見たい……私も、薊を知りたい……」
「はい、姫さま……」子どもみたいに頷いて、最後の一枚を解いた。少しのあいだ前垂れみたいにしてためらっていたけれど、意を決したように膝を開き、生まれたままの姿をさらけ出した。「あの……強く締めつけるものを着たりしますので……」
薊は陰毛を剃り落とし、あそこのまるみや性器の綻びぐあいをあますところなく見せていた。何の翳りもないそれは、いやらしさより可愛らしさのほうが強かった。赤ちゃんの手を思わず握りしめてしまうように、私はそこに口づけていた。
「……ぅあ」と、薊。「姫さまの吐息が……く、唇が……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
**株式会社キルタイムコミュニケーション**
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

**http://ktcom.jp/**

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

# あなたはどのタイプ？

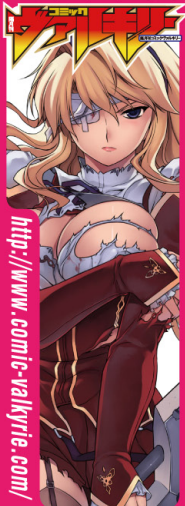
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

## http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ！
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ！
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利！
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中！




http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌！　18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出！　新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム！「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場！

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める！携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ！